

そのとき、地域で守るために

災害時に、自主防災組織は何をするの？

- 自主防災組織の活動は、自分と家族の安全が確保されたときから始まります。
- この活動は、“お互いの助け合い”です。
地域を守ることは自分や家族を守ることでもあるのです。
- 災害時には、自主防災組織の活動で培った“地域の防災力”を活かしながら、落ち着いて一つひとつ着実に行動しましょう。

地震直後

- 行方不明者、けが人はいないか確認する
- 隣近所で助け合う
- 避難行動要支援者 <p.22に詳細> の安全確認を行う
- 出火防止を呼びかける
- 初期消火を行う



家族の安全を確認したら、
まず隣近所に声かけを!

避難するまで

- 地域内の被害情報を収集する
- 火災を発見したら消防署へ通報する
- 近隣住民による初期消火や救出活動を行う
- 負傷者の応急処置や救護所への搬送を行う
- 地域の事業所などの協力を得る



避難所

- 避難所での避難生活に入る
- お互いに協力して秩序ある避難所の運営を行う
- 避難行動要支援者に対して配慮する



活動時の留意点

- 二次災害の危険があるときは、無理して救助活動を行わない。
- 本人や家族の了解なしに、勝手に建物の一部を破壊したり、家の中の物を持ち出さない。
- 大きな余震が断続的に続き建物の倒壊などの危険があるとき、火災が広がり消火できそうにないとき、地域に避難勧告や避難指示が発令されたときなどはすぐに避難する。

自主防災組織の活動を継続させよう!

- 災害は忘れかけたころにやってきます。自主防災組織の活動が忘れられることのないように、いざというときに備えて活動を継続させることが大切です。
- 防災リーダーを中心に、地域みんなが協力して自主防災組織が抱える問題に対処し、「人が集まる組織」をめざしましょう。

自主防災組織が抱える問題点

- 組織維持の困難さ ——— 活動に対する住民の関心が低いため、参加者が少なくなり、組織の維持が困難となる。
- 人的・物的資源の不足 — 後継者世代の人員不足により継続性・積極性が低下したり、資金・資機材が不足したりしている。
- 活動上の問題 ——— 活動がマンネリ化したり、活動拠点が確保できない。
- 目標の設定が不明確 — 地域の防災力をどの水準まで高めようとしているのか明確でない。



「人が集まる組織」であることがなにより大事!

人が集まる組織にするには

幅広い世代が参加できる?

特定の人・性別・世代だけの組織では、活動は活発化しません。多くの自主防災組織では高齢者が活動の中心となっているので、若者にイベントの企画してもらうなど、幅広い世代が参加できるような工夫が必要です。

自然と人が集まるような工夫をしているか?

なんらかのイベントと組み合わせる活動を行うなどの工夫が必要です。その際は、多くの人が見てみたい、体験してみたいと思えるようなものを心がけましょう。

例) 1泊2日のテント生活体験・災害を想定した障害物競走・バケツリレー競走・備蓄食料の試食会

気軽に取り組みよう!

防災の知識がないので参加できない、防災とは関係がないなどと、考え過ぎないように。どんなによい防災組織をつくっても、人が集まらなければ意味がありません。気軽に取り組みましょう。

